

【一】次の本文を読み、後の問いに答えなさい。

①コンピュータは、大量のデータを与えると、そこからパターンを発見することが得意です。例えば、あることのデータ(例えば気象データとかお店の②aコウバイ記録のデータなど何でも)を大量に与えて、その中に潜んでいるパターン(例えばあるものを買った人はいつしよにこういうものも買う、何時頃にはこういうものがよく売れる、など)を見つけることはお手のものです。しかし、発見した知識にしろ、研究者があらかじめ書き込んだ知識にしろ、その使い方が限定されない状況で、自分でその知識の使い方を発見するのは、コンピュータがもつとも苦手とするところなのです。

②いきなり「かきが食べたい」とだれかが言うのを聞いたら、みなさんはそれが果物の柿のことだと思いませんか？ それとも牡蠣だと思いませんか？「柿」と「牡蠣」では一般にはアクセントが違いますね。(A)、多くの人はまずアクセントで判断しようと思えます。一方、寒い季節に広島を旅行していて、「私はかきが食べたい」とだれかが言った時には、聞き手は普通、魚介類の牡蠣のことを指しているのだと思います。たとえ「かき」のアクセントが違っていても、人は話がされている時の状況をより重視します。おそらく、アクセントは話し手が関東出身か関西出身かによって違うということを知っていて、アクセントより状況のほうが大事だと判断するのでしょう。

他方、コンピュータにアクセントの情報や話題の情報をあらかじめ与えていても、コンピュータはそれらの情報を使って「牡蠣」なのか「柿」なのかを判断することは難しいでしょう。現在の場所と時間、広島は牡蠣の産地であり寒い時期が食べごろであるという情報をあらかじめ与えたとしても、「旅行者は旅行先の旬の特産物を食べたい」という情報を別に与えないと、この情報を使えないのです。(B)コンピュータには「牡蠣を食べたい」という発言が「旬の特産物を食べたい」という情報と関連していることもあらかじめ指定しておかないと、牡蠣が広島の旬の特産物のことなのだということさえわからないでしょう。「アクセントは手がかりになるが発話の状況のほうがそれよりも大事」という情報もあらかじめ与えておかないとコンピュータにはわかりません。人は発話の状況がわからない時は、とりあえずアクセントの情報で判断します。でもコンピュータは、今が「発話の状況がわからない」状態なのかどうかを判断することもとても難しいのです。

知らないことばを聞くと、小さい子どもは自分が持っているありとあらゆる知識をうまく組み合わせ、そのことばの意味をとりあえず推測することができると述べましたが、それらの知識はあらかじめ使い方や使う状況が指定されているわけではありません。例えば「モノの名前は形が似たものに使える」という思い込みも、モノが物質なら使えませんし、「道具」や「うつわ」のように③雑多なモノを含むカテゴリーを指すことばの場合には使えませ

ん。子どもは、ある思い込みが使える状況かどうかを他の知識を使って判断し、思い込みが役に立たない時には使わず、その他の知識を使ってことばの意味を推測することができます。このように考えると、あることに関する知識をどこでどのように使うかを指示されずに、使いたい時に使う、あるいは使っても仕方がない時には使わないということを自分で判断できるということは、それ自体が非常に創造的な行為なのです。

「知識の柔軟で自発的な運用」はコンピュータにとつて、最も難しい問題といえます。(これを人工知能の世界の研究者たちは「フレーム問題」と呼んでいます。)スーパーコンピュータでもできないこと、つまり④知識の創造的使用を、人間の子どもは赤ちゃんの時から行っているのです。

小さい子どもがするさまざまな「創造的な使い方」を紹介してきました。*アナロジーを駆使して新しいことばや言い方を創り出す子どもたちは、ほんとうに賢いと思います。(C)、だからと言って、大人は子どもに見習って「バッテリー」のことを「バッチャー」とは言いませんし、料理人のことを cookerとも言いません。料理人は cook でなければならず、cooker は rice cooker (電気炊き飯鍋)のように、料理をする器具を指します。これには正当かつ必然的な理由はなく、たまたま慣習的にそのように呼ぶようになっただけだと思うのですが、いったんそのような合意が言語のコミュニケーションでできてしまったら、子どもの創造的で理屈にあった「創りことば」は、⑤リフジンにも、やはり一般的には「言い間違い」と考えられてしまうのです。

いずれにせよ、子どもがあることばと結びつけられた限られた数の事例から自分で考える意味は、「とりあえず」の暫定的なものです。というより、④暫定的なものにならざるを得ないので。

システムの全体像も構造もわからない状況で、子どもは持っている知識を総動員してとりあえず新しく聞いたことばの意味を考え、そのことばを使っていくしかありません。そうすると、暫定的に考えた意味を、後から修正していく作業がどうしても必要になります。「創造」は「修正」ができて、はじめてうまく機能するのです。

(D)、子どもはどのように「間違い」を直していくのでしょうか。お父さんやお母さんに「〇〇ちゃん、それは違うよ、正しくはこう言うんだよ」と直されるから、間違いが直っていくのでしょうか。そうではありません。ほとんどの間違いは、子どもが自分で直してしまうのです。例えばゾウやライオンを最初は「ワンワン」と呼んでいても、ある時期になるともう「ワンワン」とは言わなくなり、正しく「ゾウ」「ライオン」ということばで呼ぶようになります。

(中略)

自分で考えて学習したことをばを絶え間なく修正し続けることによって、子どもはただ「なんとなく知っている」単語の数を増やすだけではなく、「知っている」単語の意味を深めていきます。⑤子どものことばの意味は絶えず深化と進化を続けていくのです。「発見」や「創造」にくらべ、「修正」はなんとなく地味でたいしたことのないことのように思えてしまうかもしれませんが、でも、「修正」ができるからこそ、「発見」と「創造」がことばの発達を前進させる原動力となり得るのです。

(今井むつみ「ことばの発達の謎を解く」より)

注 *1アナロジー……ある事柄をもとに他の事柄について推し量る思考法。「類推」「類比」とも呼ばれる。

問一 傍線部③④のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを平仮名で書きなさい。

問二 本文中の空欄（ A ）（ D ）に入る適切な語を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア では イ しかし ウ さらに エ つまり オ だから

問三 傍線部①「コンピュータ」とあるが、「コンピュータ」について次のように説明した。次の文の空欄（ I ）は二十字程度、（ II ）は三十字以内で答えなさい。

コンピュータは（ I ）（ ）ことは得意だが、一方、（ II ）（ ）ことは苦手である。

問四 傍線部②「いきなり『かきが食べたい』とだれかが言うのを聞いたら、みなさんはそれが果物の柿のことだと思いますか？ それとも牡蠣だと思いますか？」とあるが、次の（ i ）（ ii ）について答えなさい。

- （ i ） この問いかけからコンピュータについてどのようなことを筆者は伝えようとしているのか、次の中から適切なものを選んで記号で答えなさい。
- ア アクセント情報や話題の情報から、季節や産地などの多くの情報を与えずに、情報量が多くなりすぎて判断ができないということ。
- イ 様々な情報を与えると、いろいろな法則を見つけ出し、その法則をもとにコンピュータが自ら精度の高い判断ができるということ。
- ウ 様々な情報をいくら大量に与えても、それらの情報のつながりや、具体的な状況がわからないから、判断することができないということ。
- エ アクセントを中心に情報を与えるとき、優先順位を人が正しくつけることができれば、必要な情報を絞りこみ判断できるということ。
- （ ii ） 人はどのように判断するのか、この事例に即して四十字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「知識の創造的使用」とあるが、それはどういうことか。三十字程度で答えなさい。

問六 傍線部④「暫定的なものにならざるを得ないので」とあるが、それはなぜか。六十字以内で答えなさい。

問七 傍線部⑤「子どものことばの意味は絶えず深化と進化を続けていく」の具体例として適当でないものを一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 子どもが四輪で動くモノをすべて「ブーブー」と呼んでいたが、成長するにつれて「バス」「救急車」「トラック」と使い分けるようになった。
- イ 子どもが「大きい」という言葉を、「目に見える物の大きさ」を指して使っていたが、実体を持たない抽象的な大きさにも使うようになった。
- ウ 子どもが「冷たい」という言葉を「温度が低いもの」に対して使っていたが、「冷たい人」のように人柄を表現する言葉として使うようになった。
- エ 子どもがフィンランドの夜空にきらきら光る幻想的な現象を見て、感動し、その現象を指す「オーロラ」という言葉を知り、使うようになった。

【二】明鹿高校バレー部の宮下景（僕）は、次の新人戦のレギュラーをかけて他校との練習試合が組まれた合宿に来ていた。そこには、春高バレーの予選で宮下たちが負けた相手である稲村東高校も含まれていた。次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「よくわかったね。僕のこと」

それで僕は、歯ブラシに歯磨き粉をつける*1和泉に言った。会話の糸口というわけだけでなく、本心だった。何セットかライトで出ていた、と言われて僕は心底驚いていた。

「明鹿は春高予選で見てる」

和泉は平然と言う。「それに、バレーしている人間の顔は基本的に全員覚える」

そんなまさか、と笑ってしまいそうになるが、和泉なら本当に全員、相手校の選手をレギュラーはもちろん、ベンチまで記憶していたとしても、おかしくないかもしれない。㉠やりかねないと思った。

「そういえば、さつき食堂でミーティングをしていたな」

和泉はマスクを外しながら言った。「今日の話か？」

「まあそんなところ」

全部説明すると長くなるし、和泉は*2遊晴が「勝ちに行く」と言った相手だ。話したら手の内を明かしてしまうようで、僕は適当に㉡言葉を濁す。

でも、和泉に聞いてみたいことはあった。

「さつき、中学のときの遊晴の話を初めて聞いた。なんで明鹿に来たのか、とか。和泉くんも知ってた？」

ああ、と和泉は頷いた。

「俺も卒業前に聞いた。そのときは、そういう選択肢もあるのかって驚いた。ただ、どうせ高校でも結局バレーをやるんだろうとはわかっていた」

「へえ」

「あいつは、根っからのバレー馬鹿だろう。あそこまで楽しんでバレーする奴を、俺は他に見たことがない。だからバレーを辞めるとは到底思えなかった」

「和泉くんは遊晴と全然タイプが違った、とも聞いた」

合宿前に遊晴から聞いた話を思い出していた。和泉隆一郎はとことん負けず嫌いで、誰かに劣っていることが受け入れられない性格で、「×」たとえ部内で浮いても、努力し続けた。

そうだな、と和泉は口許を歪める。苦笑したらしかった。

「まあ俺にはわからなかっただけで遊晴も内側にはいろいろ抱えてたんだろうが、だけど中学時代あいつを見ていて、㉢自分が思い悩みながらバレーやっつてることが、何度も馬鹿みたいに思えたな」

今日の試合での和泉の姿が浮かぶ。自分の上げたトスをチームメイトが打ち切って、チームの得点になる。しかし和泉は無感動な様子だった。それは冷静というより、いまいち返すと機械的とも言えた。

僕と和泉は、バレーしてて楽しくなさそうなところがちよつと似ている。

この前、遊晴はそう言っていた。

「和泉くんは」

高校バレー界の注目選手といつの間にか落ち着いて会話できていることに気が大きくなったのかもしれない。それに、隣で歯ブラシを持つ和泉は少しだけ無防備に、普通の高校生らしく映っていた。

「バレーしてるとき、どんなことを考えてる？」

誰になにを訊いているんだ、と、すぐに㉣後悔と恥ずかしさが押し寄せた。「Y」引っ込みがつかなくて「無心、ではない？」と質問を足してしまう。

昨日も今日も、試合中の僕は考えすぎていた。でも、怪我する前は違った気がする。意識は無心というかフラットな状態で、ほとんど自動的に身体は動いていたような。それが㉤遊晴の目には楽しくなさそうに、かつ和泉と似ているように見えるのなら、この質問は聞いておかなければな

らない」と思った。

「試合中という意味でいいか？」

和泉は歯ブラシを持ったまま、じつと鏡を睨みつける。僕が頷くと、

「それなら、無心ではない。無心はありえない」と、言い切った。

「もちろん、思い悩むこともしない。反省や後悔は雑念だ。修正だけすればいい。試合中に必要なのは、雑念を①ハイジヨした上で思考し、

④行動を最適化することだ」

「最適化？」

「八秒だ」

和泉は鏡越しに僕を見据えた。◎意味を掴もうとしたけど、すぐにはわからない。

「……笛が鳴ってから八秒以内にサーブ打たないといけない、ってルールの？」

違うだろうな、と思いながら口にした。案の定、和泉は首を横に振る。

「俺が言ってるのは、もう一つの『八秒』だ。聞いたことないか」

「うん、たぶん知らない」

「バレーボールにおいて、点が決まってラリーが途切れ、次のラリーが始まるまでの時間。それが、だいたい八秒くらいだと言われている」

初めて聞く話だった。ラリー間が何秒かなんて考えたこともなかった。

点数が決まってから、試合再開の笛が鳴るまで。得点に喜んだり、サーブレシーブの陣形に移動したり、サーブを打つ選手にボールを渡し、ボールを受け取ったサーバーが床にボールをついたりする時間だ。言われてみれば、八秒くらいかもしれない。

「で、その八秒が？」

「その八秒間で、考えるんだ」

頭をフル回転させる、とも和泉は言った。「次のラリーで生じうる可能性について、この短時間ですべて洗い出して検討する。そのときのローテーション、ポジション、事前のデータとその日の相手の調子と傾向、自分の調子、味方の調子と傾向。それらをもとに八秒間で考える。パターンを整理して、次の行動を最適なものにする。ラリー中の判断速度が極限まで高まるように」

和泉にとっては当たり前にやってきたことなんだろう。その淀みない自信に満ちた口ぶりから、そして試合中彼の坊主頭の中で無数の思考が渦巻いている様子を想像して、これが一流の選手か、と圧倒される。

でも同時に、僕にもできそうだ、とも思っていた。少なくとも、試すことはできそうだった。ラリーとラリーの間の八秒で、反省とか後悔とか余計なことを考えず、次のプレイの予測を立てる。そんなふうにバレーする自分は割と簡単にイメージができて、無心になることより、ずっと簡単に思えた。

「反省や後悔は、試合が終わってからだ」

和泉は言った。「存分にやればいい。悩んだり、苦しんだりコートの外でやることだ」

「いまの和泉くんでも悩んだりするんだ」

和泉の喉元からまた、くつくつと聞こえた。

「悩んでばかりだ。自分が下手くそだと思うことも、今日はバレーしたくないなと思うことだってある。ときどきじゃない。⑤頻繁にある。バレーを始めてからずっとそうだ。同じことの繰り返しだ。ただ、俺はそれでいいと思うことにしている」

和泉はゆつくりと続けた。

「悩みながら、もがきながら、それでも決してバレーを離さないやつが一番強い」

⑤ばかり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚があった。正体はわからないけど、ポップコーンがフライパンの上で⑥イッセイに飛び跳ねるような、スイッチが切り替わって一瞬のうちに広い部屋の隅々まで照明が灯るような、そんな感覚だった。

「なんだか堅い話をしてしまったな」

和泉は手に持っていた歯ブラシをようやく、口に含んだ。

「明日、明鹿と試合できるのを楽しみにしている」

くぐもった声で言った。「遊晴も、今日俺が試合後にかけた発破で④フンキするだろうからな。あいつも俺と同じくらい負けず嫌いだ」

僕は少し笑って、そうだね、と返す。和泉の言う「明日の明鹿との試合」に、僕は出ているんだろうか、と一瞬そんな疑問が頭をよぎるが、すぐに払いのける。

「また明日」

僕が言うと、和泉は礼儀正しく目礼した。僕はトイレを出た。

④暗く静かな廊下を歩きながら、記憶を辿る。

決してバレーを離さない。

似たような言葉を最近聞いた気がする。いや聞いたというか、どこかで見たような。

細かい雨が窓を叩く。僕は足を止め、冷たい壁にもたれて考えた。窓の水滴は徐々に集まって大きくなって、滑り落ちる。

僕は携帯を取り出し、ラインを開いた。

(坪田侑也「八秒で跳べ」より)

注 *1 和泉……稲村東高校バレー部の部員。

*2 遊晴……明鹿高校バレー部の部員。和泉とは中学が同じだった。

問一 傍線部①「言葉を濁す」の意味として適切なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 適当にうそをついてごまかす。

イ 思い付きで矢継ぎ早に言葉を続ける。

ウ 敬語ではなくてくれた表現を使う。

エ 都合の悪いことなどを曖昧に言う。

問二 空欄X・Yにあてはまる言葉として適切なものを、次から一つずつ選び記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし

ウ もし

エ だから

オ また

問三 傍線部③④のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを平仮名で書きなさい。

問四 傍線部②「自分が思い悩みながらバレーやつてることが、何度も馬鹿みたいに思えた」とあるがそれはなぜか。三十文字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「遊晴の目には楽しくなさそうに、かつ和泉と似ているように見えるのなら、この質問は聞いておかなければならない」について、次の(i)・(ii)の問いに答えなさい。

(i) 誰の、どのような様子が和泉と似ていると「僕」は思っているか。四十五字以内で答えなさい。

(ii) 「聞いておかなければならない」と「僕」が思ったのはなぜか。次の空欄にあてはまる言葉を三十文字以内で答えなさい。

・和泉なら、「」から。

問六 傍線部④「行動を最適化すること」とあるが、次のア～エのうち、最適化することの例として当てはまるものには○を、当てはまらないものには×を書きなさい。

ア 相手チームの守備が強固なため、次はラインぎりぎりを狙ってサーブを打った方がよいと判断をした。

イ チームメイトが上げたトスを打ち切ることができなかったため、もっと練習しておけばよかったと後悔した。

ウ 今日の試合の様子から、相手チームを分析し、次の試合でどのように守り、攻めるべきかを考えた。

エ 相手チームのサーバーがこれまでとは立ち位置を変えるのを見て、狙っている方向を予測して守る位置を変えた。

問七 傍線部⑤「ばかり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚があった」とあるが、どういうことか。六十五字以内で答えなさい。

問八 次のア～エは波線部①～④について説明した文章である。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 波線部①「やりかねない、と思った」とあるが、和泉の自信ありげな傍若無人な様子に接して、「僕」がもとも不快に思っていた予想通りの和泉の姿に、納得している様子が描かれている。

イ 波線部②「後悔と恥ずかしさが押し寄せた」とあるが、「僕」がこのように感じたのは、和泉と話していつまでも試合の失敗を引きずっている自分に気付き、惨めな思いが沸き上がってきたことがきっかけとなっている。

ウ 波線部③「意味を掴もうとしたけど、すぐにはわからない」の描写により、「僕」はバレー以外のことは得意ではないが、理解できないことにも真摯に向き合おうとする真面目な高校生であることが示されている。

エ 波線部④「暗く静かな廊下を歩きながら、記憶を辿る」とあるのは、「僕」が和泉の言葉の意味を深く考え直すとともに、同じ意味合いの言葉をどこかで見聞きした記憶を思い起こし始めている様子である。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*₁ 相模守時頼さがみのかみときよりの母は①松下げん禪尼ぜんにとぞ申しける。守かみを入れ申さるる事ありけるに、すすけたる*₃あかり障子しょうじの破ればかりを、禪尼、手づから、小刀

(お招き申し上げなさる)

(自分の手で)

して切りまはしつつ張られければ、*₄兄せうじの城介義景じょうのすけよしかげ、その日のけいめいして候さうらひけるが、「たまはりてなにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得

(準備をして)

(その障子をちょうだいして、なんとかという男に)

(そのようなこと)

たる者に候ふ。」と申されければ、「その男、尼が細工に②よも勝り侍らじ。」とて、③なほ、ひとまづつ張られけるを、④けふばかりは、

(私の)

(やはり)

はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも見苦しくや。」と重ねて申されければ、「尼も、後はさはさはと張りかえんと思へども、⑤けふばかりは、

(さっぱりと)

わざと④かくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理しゅりして用ゐる事ぞと、*₅若き人に見習はせて、心つけんためなり。」と申されける、いと

ありがたかりけり。

世を治むる道、儉約けんやくを本とす。女性にょしやうなれども、聖人の心にかよへり。天下を保つほどの人を子にて持たれける、まことに、ただ人にはあらざりけると

ぞ。

(「徒然草」より)

注

- * 1 相模守時頼……北条時頼。後、北条家として五代目の執権となった。直後の文の「守」も時頼を指す。
- * 2 禅尼……仏門に入った女性のこと。
- * 3 あかり障子……現在の障子のこと。明かりを通すように木枠に和紙を貼った建具。
- * 4 兄の城介義景……松下禅尼の兄。
- * 5 若き人……息子の北条時頼のこと。

問一 波線部㊤「なほ」・㊦「けふ」の読みを現代かなづかいで書きなさい。

問二 傍線部①「松下禅尼とぞ申しける」に含まれる表現技法として適切なものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 擬人法 イ 体言止め ウ 係り結び エ 倒置

問三 傍線部②「よも勝り侍らじ」の現代語訳として適切なものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア まさか及ばないでしょう イ きつと匹敵するでしょう
ウ まさか劣らないでしょう エ きつと勝っているでしょう

問四 空欄③に入る語として適切なものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 時頼 イ 禅尼 ウ 義景 エ なにがし男

問五 傍線部④「かくてある」について、次の各問いに答えなさい。

- (1) 「このようにしておく」という意味であるが、具体的にはどのようにしておくことか。二十字以内で答えなさい。
(2) なぜ、このようにしておいたのか。禅尼の目的を本文全体の内容を踏まえて三十字以内で答えなさい。

問六 本文の筆者名を漢字で書きなさい。

国語 解答用紙

受験番号		名前	
------	--	----	--

[illegible][illegible][illegible]

問一	①	問二	問三	問四	問五	問六	問七
購買	①	A オ	I 大	i ア	ii ク	シ ス	業 数
		B ク	II 知	i ウ	を よ	断 で	が
			を 発		を リ	き こ	の
			識 の	②	重 視	と に	事 例
			に 与	③	ソ ト	こ と	要 必
			見 す		を 手	。	人 の
			る		か が		全 体
					に し		自 分
					つ つ		像 も
					も 、		構 造
					④		味 を
					わ な		考 え
					⑤		分 か
							、 ら
							後 な
							い 状
							修 況
							で 、
							正 し
							限 ら
							い れ
							く た
							作 た

[illegible]

三																									
問一	問二	問三	問四	問五		問六																			
1	ナ	ア	ク	(1)	(2)	兼好法師	せ	る	た	め	・	②													
なお	II	②	②	障	下		天	る	た	め	・		⑥												
				子の	を		を	治	め	・															
				の	破		れ	め	・																
				破	れ		め	・																	
きょう				た	る	に	は	俊	約	が	大	切	で	あ	る	こ	と	を	時	頼	に	気	付	か	
①×2				所	に		だ	け	を	張	リ	替	え	て	お	く	こ	と	を	時	頼	に	気	付	か